

群れなびく峰に立ちて

吉野群峯踏破記(その三)

なら民俗通信

西村 博美

▼大台への道

大正四(一九一五年)、森口奈良吉らの吉野群峯踏破を企てた一行は、出発から七日目の八月一日、樺川(とちがわ)に沿って大台ヶ原を目指した。

「大台への道は之を踏破せし大和アルプスの道に比すれば殆ど平地を行くが如き感がある」とは、踏破記にある森口の強気の弁だが、『吉野群峯』、これほど雨にたたられた登山行も珍しいというべきか。ましてや大台は、わが国でも有数の降雨の「名所」である。大蛇倉(壺)〈だいじゃくゝ〉へ急ぐ途中に「たちまち雨沛然(はいげん)として来り(一回大弱り)て濡れ鼠(ぬすみの)のまま、油紙をかきさしても盛んに燃えてしまつたよな

を「旦那衆の山のほり」

始末。

二百は、大台教会に滞在。三日もまた雨。この路破を企てた一行は、先、森口には思わぬ人々とのうれしい再会があった。

雨を避けて向かった入之波(しおのは)鉱泉で、小学校同級の今は医師となつてゐる有川某と、また混浴の湯に浸かつてゐるうちの一人は、二十年前に森口がかつて小学校で教えた女性であった。当時の奈良県尋常師範学校を明治二十九(一八九六)年に卒業した森口は、地元吉野郡の小学校訓導として二年間を送つてゐる。

▼山で鍛えた足

「師範学校入学の資格を得るため」一年間だけ古市場小学校に通学したのである。目立って小柄な奈良吉少年にとつて、木津川・古市場間往

復二十五キロの山道通学は、相当の負担だっただろう。しかしながら、私には、桜峠の難路を朝夕に越え行く奈良吉少年の足どりは、師範学校入学の希望に燃えて、力強くかつ軽やかだったに違いない、『まほろば』十四号「森口奈良吉翁特集(号)」。

文 化

(四月六日付本紙)と題したのも、峻険(じゅんけん)な山道をとらざるを得ない「難業」を遂げようした、教員や実業家などのいわば足腰弱そうなた々の無謀なようなものに向けて、筆者(西村)の多少の皮肉を込めたつもりもあつたからである。

森口奈良吉は、明治八

白い花咲くころ旅終える

船津もまた吉野郡出身で、長く県の教育界にあつた(ちなみに筆者・西村の中学校長)。前掲の跋田は、「在学中の奈良吉は知縁の校長宅に下宿した」と記しているが、それにしても船津の言うところもあながち脚色とばかりでもないと思ふ。「森口自身もまた、家業の材木の伐り出しを交

に手伝つて、篋(いかに)にも乗つたという。このよもな生活の中で奈良吉は、難路の山道に親しみ、幼年時より自然と足腰は鍛えられていつたに違いない。

タビユををしたことがあつたと記している(昭和四三年二月六日付「大和タイムス」)。森口は、北村に答えて「(大峯の)オオヤマレンゲの花が美しかったことが思い出される」と語っている(北村信昭『奈良いま昔』奈良新聞社)。吉野名山の植物にも詳しい白井光太郎は、『吉野群峯』で、大峯には他山には見られないオオヤマレンゲの純林があり、峰から谷に繁茂してゐる。また、「花は純白にして径二三寸、花弁は六個ないし九個、高深幽寂の趣あり」とは、奈良吉と同時期に大峯に上つた竹下英一の記すところである(同上書『大峯の花木』)。それは、大正四年という、遡(さかの)ぼれば今から一〇〇年も前の、ちよつと不思議な、オオヤマレンゲの白い花の咲くころの吉野群峯全踏破の旅でもあつた。

(一八七五)年、奈良県吉野郡小川村(現東吉野村)に生まれた。四歳で木津川小学校に入学、常に成績は「優等」であつたよだが、家運が傾いたため高等科を中退し、一時、和歌山の材木会所に勤めた後、同県の宇陀郡にあつた高等小学校に復学している(跋田真澄『丹生川上神社と森口奈良吉翁』年譜)。

船津生国男は、森口を回想して次のように記している。

五の扉(なびき)と名づけられる行場がある。いわはそれぞ各所が、信仰の聖地とされてきたといつことが出来る。

予定



大台教会前の一行。前列向かへ左から3人目、森口奈良吉(吉野群峯写真帳)

「逆峯」(さかたね)は七十三番の吉野銅(かね)の鳥居から修行するところ(『山の宗教』修験道)。いままでは、本稿で追つてきた踏破団一行のコースを見れば、修験願談を聞くために、関信太郎と森口奈良吉にイン